

## びわの実の熟れるころ

岐阜県 大野 君子

これから始まる新しい生活に胸をふくらませながら、私が大陸（満州）に渡りましたのは、昭和十四年十九歳の春、四月でした。

撫順・新京・奉天と教職にあった主人に従って、満州の大都市を移動しました。

撫順で聞いた開戦の日の東條首相の高揚した声が、今も耳底に残っています。七年二カ月間の在満期間は、子育てに追われ、台所から外を眺める程度で、全くの世間知らずでした。

### 終戦

終戦のあの日の空も 青かった

吾子の 墓石に 百日紅さくすべり 映ゆ

（終戦後、昭和四十年 二児の墓参の折に）

昭和二十年八月十五日が巡りくる度に、昭和二十年

奉天（現瀋陽）で迎えた終戦の日が思い出され、その思いを忘れることはできない。

昭和二十年八月九日のソ連参戦以来、二十四時間、警戒警報はちつとも解除にならない。それまでも毎日のように警報が発令されていた。夏は昼間が長いので午前中に、冬場は午後には、北支の基地からアメリカのB29が飛んできていた。大空襲は三回、一回目は駅前の密集地帯、二回目は鉄西工場地帯、三回目は飛行場であった。三回めの空襲のとき、日本軍が全市に煙幕を張った。発煙筒から出る煙は家と家との間を埋め、何も見えなくなってしまうと、この世の終わりのように、恐怖のためにじっとしておれないほどであった。敵機は無差別爆撃をするものとびくびくしていたけれど、発煙筒の在り場所が分かったとか、それに向かって、B29が集中攻撃をしたのだと、後から聞かされた。八月九日のソ連参戦以来、ソ連機は私たちへの神経戦をねらって、夜となく昼となくやってきて、奉天上空を旋回する。アパートの前の広場に作ってもらった防空壕に五歳・二歳・一歳の史郎・洋志・義樹をつれ

て避難するのだが、主人は敗戦の日まではほとんど家に帰らず、飛行操縦士の養成のため、グライダー合宿所におり、家を離れていた。主人が町内の広報会長をしていたので、何か連絡事項があると、義樹を負ぶつて壕から壕へと走り回った。

そういう中で、いよいよソ連軍があと三日で奉天市に入城するというのである。婦女子は南満へという命令が伝達され、私は主人が合宿に行っている奉天一中の生徒さんたちを早く親元に帰してあげなければと言っているので、奉天一中に何度も電話した。

「学校の方から訓練地へ連絡をとってください」と。やっと連絡が届き、生徒さんは親元に帰り、主人も帰ってきた。

八月十五日の朝。あの日の空はとても青く、雲一つない焼けつくような暑い日であった。家を出発する前に警戒警報が解除になった。正午に重大放送があると、ラジオが報じていた。

「何だろう……」駅に向かう道は長く、気持ちは沈みがちであった。ジリジリと照りつける真夏の太陽は暑

く、空の青さが目に染みるほどであった。モンペを穿き、長袖に防空頭巾のいでたちではとても暑く、義樹は背中をむずかるのをあやすのに困った。

目の前には、南満へ向けて出発する何両もの汽車が停車したり、北満へ行く貨車も通り抜けたりして、奉天駅の汽車は私たちの気持ちをふりきるように動き続けていた。

奉天市には屈強を誇った関東軍の精鋭も、市街を警備する警察の人たちの姿もない。軍の機密に通じている人たちは、自分の身、わが家族を伴って逃走し、残された一般市民は手榴弾でソ連戦車に立ちはだかれとの命令である。むろん、わが身もろともである。別れたら最後、再び相見ることのできない別れなのである。そして、南満へのがれるわが身や子供だって、何日命を長らえることができるだろうか。

#### 重大放送：敗戦

ガガツ、ガガツと雑音に交じって正午の時報が、ラジオのスピーカーから流れ、それまでの騒音と人の動きがびたっと止まった。みんなラジオに近寄り、聞き

耳をたてて、これから放送されることに不安と期待を抱いた。

「天皇陛下の放送があるそうだ」とだれかが言った。雑音に交って聞こえてくるのは、たしかに天皇陛下の声である。国民総攻撃を励まされるのであろうか。それとも日本が危ないというのであろうか。声をのむ千人余りの集団は、ラジオの話に耳を傾けている。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び、棘の道を歩み……」声は続く。

「戦争に負けたんや」

「そんなばかなことがあるか」

「関東軍はどうしたんや」

「最後の一人まで戦って……」

悲鳴とも怒号ともつかない声が渦のようにどよめき、やがてその声も小さくなったかと思うと、それはすすり泣きに変わっていた。男の人は天を仰いで泣き、女たちはおいおいと声をあげて泣いた。

放送はとづくに終わり、すすり泣きは一時間も続いたであろうか、だれかが、

「こんなところにいてもしょうがない」

「家に帰ろう」

「戦争に負けたんや、家へ帰るしかない」と。敗戦国日本という今までに経験したことのない複雑な気持ちで、三三五五家路に着いた。

途中、路傍にいる中国人は不審な顔で、うなだれて声もなく帰る私たちを眺めていた。戦争に負けるというところが、どういうことなのかということは、その後、約一年間奉天を去るまで、いやというほど思い知らされた。

今、自分の住んでいる国、満州国が、一夜にして消滅してしまったのである。国がない、警察もない。身を守ってくれるものはない。命を大切にし、自分の身は自分で守らなければならない。貯金は一銭も出せないで、通帳はすべてほごである。自力で収入の道を見付けなくてはならない。それよりも何よりも、いつ日本へ帰れるようになるのだろうか。日本との間にある海が私たちの前に暗黒の大きな口を開けて無気味に横たわっている。

今朝、不安な気持ちで家を出たその家に、家族が皆、揃って帰ってきた。

その夜は開戦以来四年ぶりの平安な眠りについた。

### 武装解除・暴動・難民

八月十八日は関東軍の武装解除の日である。日本軍の面目を考慮して、暗いうちに行われた。わが家から百メートルほどの千代田公園で未明にかけて行われたが、その様子は知る由もない。千代田公園には、武器やトラック戦車などが山積みされていたし、日本の兵隊さんはすべて丸腰で哀れさを感じた。

十八日のその夜から奉天市の各所で暴動がおこった。鳴り物入りで缶や鐘を叩きながら、大勢で「ウアーウアー」と氣勢をあげて、日本人を襲うのである。先導はソ連兵で、自動小銃を時々「バババツ」と撃ちながら来る。この暴動は翌年二十一年の三月まで続き、夜も寝た心地がしなかった。

私たちの教員アパートでも、暴動に対処して居残っている男の人が指揮して防衛した。まず婦女子は全部二階、三階に集合、一階は男の人々で固めた。二階の

ベランダには空き瓶や石などが集められ、楠正成の千早城の攻防よろしく、上から投げつける段取りである。男の人は皆、日本刀を持っている。どの人も外地でどんな目に遭うか分からないので、日本刀を仕込んで持ってきている。そして一階の守備につき、二階の階段には検間の装置を作って、くぐり門の両脇にも守備の人がつき、ソ連兵を監視した。

婦人は子供を遊ばせながら、炊き出しのおにぎり作りに忙しかった。作業をしながら、「どうやって死のうか」と話に花が咲いた。「日本人として恥ずかしくない死に方を考えてほしい。いざとなったら薬を配る」と伝達されて、緊迫した空気が胸をしめつけた。

戦争が終わったというのに、こんなところで生死をさ迷わなければならないとは……。窓の外には小銃の弾が、「ヒューン、ヒューン」と飛んでいる。この弾がいつ私たちの命を奪うかわからない。それこそ犬死にはではないのか、犬死にはしたくない。

私たちのアパートでも男手は極度に少ない。ご主人を戦地へ送っておられる奥様方は、地方別で固まった

り、仲良しで固まったり、それぞれ自衛の道を考えておられるが、心細い限りである。

南満の集結地は奉天市（現在の瀋陽市）であった。

地方にいた日本人は終戦と同時に我が家を追われ、続々と奉天市に避難のため、たどり着いた。着の身着のままでむしろを腰にまき、あら縄の腰紐に空き缶の食器をぶらさげ、頭の前から足の先まで、これが日本人かと思うような格好で、奉天市に命からがら逃げて来たという様子であった。

主人は、あちこちの学校を尋ねて、お世話になった加賀谷先生のご家族を捜し回っていた。

着の身着のまま、小さな包みを銘々に持って、主人の案内で加賀谷先生ご一家が、私どものアパートに着かれたのは、四平街の青木さんが、満鉄が動くようになって帰られたあとであった。

「加賀谷先生は見えませんか」と大声で收容所から收容所へと探し尋ねて、とうとう探し当てたのだそうです。昼間も暴動で危険な中を先頭は主人、最後尾は加賀谷先生、帯につかまって危険な中を突破してきた

そうです。

加賀谷先生は、奥様、長子ちゃん、宣子ちゃん、洋子ちゃん、勲君の六人でした。修ちゃんは広島島の幼年学校、ご母堂様はたまたま高山へ帰っておられて、一番ホツとされていた。営口に住んでおられた先生ご一家は、終戦と同時に「二時間以内に日本人は営口を立ち去れ」という退去命令に、命からがら奉天市にたどり着かれた。途中、ちよつと列を離れるとたちまち持っている荷物を奪われてしまう。やつとの思いで集結地奉天に着かれたそうです。お年寄りが見えなかつたので、何とか奉天までこられたのでと、しみじみと話されていた。

主人は毎日、家族と加賀谷先生ご一家の食料を補充するために、郊外へでて農家で南瓜や馬鈴薯を手に入れた。時にはソ連兵につかまって芋掘りの労働奉仕をさせられ、夕方になつても帰らなくて本当に心配したことがあった。

お陰で南側の出窓には南瓜が積まれ、馬鈴薯も一分の冷凍が十分用意され、ほっとしたものだった。守

備隊からいただいた牛肉の缶詰は床下の倉庫にぎっしりつまれ、米も十分あって、用意は整い長期戦に備えていた。

毎晩、夜になるとドラを鳴らし、「ウワー、ウワー」と大勢の力をかりてどよめきのように威嚇しては日本人の住宅を取り囲み、略奪をしたり、拉致したり、暴動の勢いが増していった。その集団の先頭には、マンダリン型の自動小銃を肩から下げ、時々、威嚇射撃を繰り返すソ連兵がいた。それを取り巻く満人も多勢を頼んで雷同していた。

八月十八日の関東軍武装解除の翌日からの無政府状態で、治安は極度に悪く、日本が日露戦争後、営々として築いてきた建物は床板から水道の蛇口まで略奪され、道路が水浸しになったりして大変であった。やがて水道は止まり、停電は続き、原始的な生活を余儀なく強いられることになった。

#### 一般市民男子拉致さる

昭和二十年九月二十日、

「日本人の男子で兵役の義務のある男子は集合せ

よ」

中国の警察の名で、各家に回覧が回った。武装解除の折、日本軍兵士の数が少なく（終戦と同時に関東軍の兵士が逃げたのか）、その穴埋めに一般市民の男子が召集されたのである（あとから判明した）。

私たちの朝日区も班長さんを先頭に列をつくって警察に向かった。夕飯までには帰るつもりで、みな軽い気持ちで出掛けた。わが家でも史郎と洋志は小旗を持って、お父さんを見送りに行った。が、いよいよ出発という直前に二人の子を連れて家に帰ってきた。虫の知らせか夜冷えこむといけないからと、ラクダのシャツを重ね着した。加賀谷先生から炒り豆をいただいて出発した。それから満三年二カ月間、生き別れになるうとは、知る由もなかった。

奉天市民男子の一団は、中国警察署の前に続々と集合した。表は中国警察名で、裏にソ連がいたことを知る由もなく、自動小銃を持ったソ連兵にワツと取り囲まれ、有無を言わずトラックで北陵の捕虜收容所に入れられてしまった。

留守宅では、今日帰るか、明日帰るのかと待ちに待った。何の連絡もない。そのうちに日本居留民会から、「一週間経つて、調査が済んだら帰す」「十日経つたら帰す」「一カ月経つたら帰す」……と空しい伝達だけが流れた。

と、ある日、主人が奉天駅の車窓からレールの上に投げた手紙を住所を捜しあてて、見知らぬ日本人の男の方が届けてくださった。

手紙の前半には、取り囲まれて連れて行かれた様子、毎日トラックに乗せられて奉天郊外で強制労働させられていたこと、調査の結果、兵役の義務が免除になっているので、明日、家に帰れる……と。

「と、夜中に出勤命令がでて、どこかへ連れて行かれるらしい。けれどソ連は日本兵とはちがうから、むやみに殺しはしないだろう。白分は骨を大陸に埋める覚悟だから現在の奉天の家で待つていてくれ、……それでも日本人全員が引揚げという事態に至つたら、日本へ帰れ……、そして遠藤に相談してくれ……最後に、

吹く風に散りゆく木の葉な嘆きそ

冬に耐えなば 春ぞくるなり

この手紙が手元に届くことを祈る」と書かれていた。暴動は毎日続く。

「マダム、マダム」とソ連兵が追っかけてくるので、外出することもできない。主人の教え子の奉天一中の方々が、掘り井戸から水を汲み上げてくださったり、使い走りをしてくださったって、とても助かった。同居してくださった加賀谷先生ご一家が、いつ日本に帰れるかが分からないから、いつまでも大野さんに甘えてはおれないからと言われて、浪花町で一室を見つけて引越された。主人はいない、子供は小さい、心細い限りであった。

### 三男義樹死亡

間もなく史郎が麻疹はしかにかかった。続いて洋志と、暖かくして麻疹がひくのをはらはらして祈りながら見守った。二人は抵抗力もあり、病後を迎えてほつとした矢先、義樹が麻疹にかかった。麻疹がかれ始めたある日、上の二人を連れて、加賀谷先生宅をおたずねした。加賀谷先生宅では、先生と同居の村橋さんが街頭でい

ろんな物を売って日銭で生活しておられた。何とかめどがついたからと喜んで迎えてくださった。さつまいものふかしたのやら、とうもろこしなどを御馳走になり喜んで帰途に着いた。義樹には病後であり負担だったのでしようか。消化不良が続き、診療所の先生に一日おきに往診をお願いしたが、だんだんやせて顔色も青白くなっていく。主人がいてくれたら奉天医大病院にでも駆けつけてくれるのにと、残念だが心細い限りであった。

こんな状態が三週間も続いた十二月一日の夜、ソ連兵の来襲に備えて夕方暗くなるまでにと北側の廊下の窓に板を打ち付け終わって二階に駆けあがってみたら、義樹の様子が変なのである。

上の子の夕食を先に食べさせた後、義樹にお菓を飲ませようとしても、口からたらたらとこぼしてしまう。そのうちに呼吸がおかしくなり、脈もかすかになって、ついに息絶えてしまった。胸も頬つべたも暖かで、死んだとは思えない。いつものように添い寝をして一夜を明かした。枕経も自分であげ、冥福を祈り手を合わ

せた。

翌朝、加賀谷先生と中島先生がきてくださり、長沼公園で茶毘に付してくださった。奥さんは家で待っていてくださいと言いついて出かけられ、夕方にはお骨を届けてくださった。

冷たくなってしまった義樹は白骨に変わり、私と二人の子供の三人の生活が始まった。いつ内地に帰れるのかあてもなく、夜は戒厳令が布かれていて暗黒であり、ただ見回りのソ連兵が撃つ自動小銃の「バババーン」という音が闇の中にこだましていた。

わが家は一度もソ連兵に入られなかったが、隣の島田さんの所に五人組が入ったときなど、「ガシャ、ガシャ」と長靴で廊下を歩く音が聞こえてきて、家で震えていた。島田さんは娘さんと奥さんに自動小銃をつきつけられ、朝になっても唇の色が戻らず、震えが止まらない様子であった。時計から晴着などすっかり取られてしまったと嘆いておられた。

#### 四男茂実の出産

義樹を亡くして悲しみも消えないうち、関東軍の方

が残していかれた武器の心配で、夜も昼もおろおろした日が続いた。でも、あの長い指揮刀が日本人の使役の方の手で、前の空地に埋められて、親子でホッと胸をなで下ろした。

外は相変わらず暴動が続いていたが、義樹のお骨は仏前に安置してあり、朝晩、読経をしては主人の無事もお祈りした。

こんな状態の中で、日一日とお産が近づいてきた。夜になると暴動の怖さと、産まれたらどうしようという不安とで、時々、お腹が痛くなった。お産婆さんに相談したら、「夜は外出できないから、泊まってあげてもいいよ」と言われる。上の子は五歳、下の子は三歳だし、百メートルほど離れたお産婆さんの家まで呼びに行くのは危険である。西隣の古橋さんにお願すると、「夕方の六時までなら呼びに行つてあげます」と言われる。

「苦しい時の神だのみ」

万事窮す。朝晩、お経をあげて大野家のご先祖様にお願した。

願いが叶ったのか、昭和二十一年三月一日、午後三時から陣痛が始まり、古橋さんの連絡で無事お産婆さんに取りあげていただき、午後六時には帰っていたことができる。

暴動の最中、主人もいない家庭で幼い子供を頼りに無事出産ができたこと、ただただご神仏のご加護であったと感謝申し上げた。

三月といってもまだまだ寒い。次の日から家事一切をしなければならず、寒さのために腰や足の関節が痛くて動けなくなってしまう。幸い北満からの引き揚げられた方に、四十日間、看病と家事を手伝ってもらい、少しずつ快方に向かつてきた。

四十日間も寝たきりだった私と子供三人の一家に引揚げ命令が下った。

出発は六月三日。

帰国、引揚げ開始

昭和二十一年六月三日、私たち親子四人は、住み慣れた奉天市朝日街一段四十二号のわが家をあとにして、北奉天に向かったのです。

私たちの旅立ちには、故国日本への筆舌に尽くしがたい苦難の旅立ちでもありました。私たちが玄關を出ると同時に中国の人たちがどつと入り込みました。思い出多い物ばかりなのに、何一つ持てない敗戦国民の私たち。女は男物さえ持てないというので、主人のドイツ製の形見の時計も手離してお金に換えました。主人の形見といえば、茂実をゆわえる帯だけでした。手も通していない浴衣は、おむつにして大風呂敷に包み、その都度捨ててきました。

この日の引揚げは、主人を捕虜にとられてしまった婦人と子供ばかりの部隊で、一般市民より一足早いものでした。主人の教え子の田中汎様（奉天一中二年生・現横浜在住・父シベリアで死亡）は、お母様に言いつかって、私たちを奉天の收容所まで送ってくださいました。駆けつけてくださった近所の奥様が、「どうもソ満国境を越えたらしいよ」と、主人たちのその後の動向を教えてくださいました。この同じ陸地続きのどこかで、主人たちが難儀をしてみえるのかと思うと、心は後ろに引かれ、最悪の場合は、これで散り散

りになるのではと心細く、後ろ髪をひかれる思いでした。

北奉天までは馬車で一時間ほどもある道のりでした。敗戦国民は、奉天駅から乗ることはないというので、遠く離れた小さな駅から乗せられました。その前に當時二千元ずつ出し合つて貨車に積み込んでもらった米も、敗戦国民に米を食べさせることはないというので、全部高粱コウリヤンに換えられました。

いよいよ北奉天駅近く俘虜收容所に到着し、リュックサックを背負ったときの重かったこと。二十五日分の食糧、一枚ずつの着替え、一番上には三男義樹のお骨が木箱に入っています。薄い小さなお経の本も入れました。義樹は骨になって私たちを守ってくれているのだ、と自分に言い聞かせては冥福を祈りました。

いよいよ汽車に乗り込む前に、持ち物の検査がありました。右手を斜めに上にぴんと伸ばし、左手と背中、体につけて持ち得る限度までは持ち帰ることができません。検査官の前の二十メートルぐらいの距離を通過する間に、下に落とした荷物は、もう自分の物でなくな

つてしまうのです。

史郎・洋志の二人の子どもは、自分に持てる範囲の限度まで身につけさせました。たった一人生き残っても、岐阜市又丸までたどり着けるように、白い布に行く先と氏名を墨で書いて縫いつけました。

私も背中にリュックサックを背負い、前には生後三カ月の茂実を帯でしっかりと縛りつけ、左手におむつの大きな包み、右脇に薬、かばん、その上、五リットル入りのやかんを持ちました。夜寒に備えて二枚続きの毛布をリュックサックの外側にまきつけ、洋傘を杖のようにして歩きました。子供たちにも歩きやすい靴をきちつと履かせました。

ようやく検査官の前を通り越した時には、左手はしびれてしまつて、危うく荷物を落とすところでした。

次に一人、一人の身体検査です。国外へ持ち出さないように禁じられている宝石類、書類を持っていないかを調べるのです（収容所の便所へ写真を捨てました）。男の検査官が体の前後をずつと調べ、持ち物の内容を点検します。骨箱をガタガタとふり、まだ不審

なので蓋をとつてガラガラかき回し、宝石がなかったので通過できました。

いよいよ汽車に乗りこむのです。むろん座席などありません。無蓋の貨車です。

これでいよいよ日本に近づける、一日一日が生地獄のような暴動の奉天とも別れることができるのだと、ホッと安堵の胸をなでおろしました。

大陸の六月は日本の真夏のように暑いのに、夜はふとんなしではとても寒くて眠れないほど気温の差があります。まして、四男は三月一日生まれ、生後百日も経っておりません。六歳の長男はこの四月に奉天で入学式をしたばかり、次男は四歳になったばかりの幼い子連れの旅が始まろうとしているのです。

検査を済ませた私たち引揚げ部隊は、全員無事、無蓋車に乗り、午後の陽を背に浴びながら北奉天を出発しました。

第一陣は遠い辺地から奉天に集結していた家のない人たち。続いて私たち俘虜部隊でした。部隊長、大隊長、中隊長は男の人でしたが、そのほかは、皆主人を

捕虜にとられた女と子どもばかりでした。だれの力にも頼ることはできません。

無蓋車に照りつける太陽は私たちをいりつけ、五リツトル入りの大やかんは子供たちののをうるおすのに大活躍でした。

やがて停車。みんな便所に行くのです。でも、施設があるわけはありません。最初は恥ずかしくて、きよろきよろ辺りを見回して、やつとの思いで済ませたものでした。

のろのろと走る汽車。やがて赤い夕日が西の地平線に沈み、暗いとぼりが下りると恐怖の夜がやってきます。人家も何もない暗い暗い野原の真ん中で、ゴットンと汽車が止まります。

と、懐中電灯の光を点滅させながら、娘さんを捜しに男がやってきます。毎晩、幾人かの娘が連れ去られてしまいます。責任者の方々が必死になって交渉してくださいます。

「○○円持参せよ」

と、条件をつきつけられ、その度に金を出して娘さん

を引き取りに行かれたようですが、何しろ毎晩のように拉致されるので、娘さんを連れておられる親御さんは、生きた心地もない道中でした。金をさし出すまで、いつまでも汽車は動かないのです。

第一日は昼食を口にできませんでした。次の日からは、持参した乾パンと、汽車を止めては大釜で高粱を炊いてもらえるのです。むろん塩味だけのバラバラでまずいものです。小さな子が下痢でもしたら大変だと思つて、一度も食べさせませんでした。中国人に売りに行く御飯を買つて食べさせ、余分に持つて出たお金が、だんだん少なくなるのが心細い思いでした。

赤ちゃんには、さいわい親切な方がおつぱいをくださったたり、ミルクを飲ませたりして、どうにか命をつなぐことができました。もともとお乳の出の少なかつた私は、もう一滴もでなくなっていました。

奉天を出て五日目だったか、地名も分かりませんが、下車して今夜の宿まで歩くのです。無蓋車の恐怖の夜でなく、久しぶりに屋根の下で眠れることを喜んで歩き始めました。行けども行けども目的地までは遠く、

重いリュックサックを背負つての行軍は、言葉もでません。

「大休止」と号令がかかっても、子供たちは、「リュックサックを下ろしてはいかん」と懇願します。下ろしたら、自力で立ち上がれないのを知つて、心配するのです。

夕暮れ近く丘の向こうに日本人の空き家があり、そこに宿泊することになりました。畳一枚に三人ずつという割当てで、足を壁の方に曲げて眠つたことが思い出されます。飯盒に主食を分配していただき、塩と梅干で食べた夕食はこの上なくおいしかった気がしました。

翌朝、また無蓋車に乗り、ガタンゴトンとゆられ、目的地の壺蘆島へ向かいました。

その間、奉天を出てから十一日間、平常なら一昼夜あれば十分なこの旅程を、十一日間炎熱の中を大陸の出口に向け、やっとたどり着きました。

岩壁に横付けされてみんなの乗船を待っていたのは、アメリカの上陸用舟艇（二千七百トン）でした。戦い

の済んだあと、敗れた日本の立場を思い知らされました。

夢にまで見たこの海。あとはこの海さえ無事に渡れば、故国、日本の土を踏むことができるのです。

船に乗り込んでからの毎日、次々と死んでいく人がでてきました。中でも子供は抵抗力がなくて、病気がかかったら死を覚悟しなければならぬほどでした。家から持つて出たヒマシ油が、名古屋の方の子供さんの命を救つたり、うちの子も梅肉エキスのお世話になつたりしました。時々、まとめて水葬が行われました。海に投げ込まれた亡骸なきがらの周りを大きく円をかき、ポーツと追悼の汽笛を鳴らします。みんなで合掌する中、船はまた日本に向けて進みます。

茂実のミルクは底をついてしまいました。十八日間も海上にいる間に一カ月近くなり、予定の二十日ははるかに越えてしまつたのです。船員さんをお願いして朝晩、重湯をいただくことになりました。玄界灘の船上には太いロープがはられ、そのロープにつかまりながら、船室まで赤ちゃんの重湯をもらいに通いました。

## 帰国・帰郷

博多の検疫も終わり、発車の時刻を聞きますと、今夜は出ないと言われました。赤ちゃんは虫の息。歩いて次の駅まで。二人の子供をゆり起こして歩き始めたのが、七月二日の午前零時。長男も次男も黙って、涙を振りはらいながら歩きました。一時間ほども歩いたでしょうか、汽車は発車寸前でした。

途中、いろんな方々のご親切にあずかって「岐阜、岐阜」の声、駅に降り立ったときは、感激で声もでません。岐阜駅下車の南方帰りの兵隊さんが親切にリュックサックを持ってくださり、引揚援護局にたどり着きました。

「国敗れて 山河あり」

岐阜の町は焼野が原で、岐阜駅から忠節橋が見えました。忠節橋の上から眺めた金華山は昔のままで、私の疲れた心を慰めてくれるように温かく、清流長良川は清々しく「お帰りなさい」と迎えてくれているようでした。

## 【執筆者の横顔】

大野君子さんの夫君、大野小次郎氏は岐阜県師範学校卒業後、北方小学校教員在勤当時、満州国関東州の瓦房店公学堂（中国人小学校）を希望され、ここで中国語、中国事情の研究をし、さらに、北京に留学し、研鑽を深められた。

その後、満州の撫順高等女学校、満州国文教部の奉天一中で中国語の指導をしていたが、戦後シベリア抑留者となった。帰国後は岐阜県の教職に就き、各中学の校長を歴任し、昭和五十三年退職されてからは、岐阜県から訪中の際は通訳として同行すること八回、岐阜県日中友好事業に尽力すること至大の功労者である。君子さんは、大正九年生まれで七十五歳であるが、

岐阜県女子師範学校を卒業して、小学校教員をしていた。昭和十四年四月、小次郎氏と結婚して渡満、教員を退職し、よき伴侶として夫君を助けていた。

昭和二十年八月にソ連軍の不法侵攻に遭い、日本敗戦の憂き目となり、苦労は惨憺たる中に、夫君はソ連軍に連行され、君子さんは幼子三人を連れて、奉天で

の避難民生活にあえぐ。子供は麻疹にかかった五歳の史郎君と三歳の洋志君は抵抗力があつて助かったが、一歳の義樹君は麻疹の病後、消化不良が続き、呼吸困難となり、ついに息絶えた。

三男を亡くして、悲しみも消えないうちに産気が近づき、二十一年三月一日陣痛が始まり、暴動の最中、主人もいないところで男の子を出産した。

昭和二十一年六月三日、奉天から引揚げが始まり、親子四人は筆舌に尽くしがたい苦難を経て、故国にたどり着いた。

故郷に帰って「故郷はありがたきかな」と感激の涙を流した。君子さんは、教員に復職することができ、三十有余年間勤めて定年退職した今日、「戦争は二度とくりかえすな」と祈念している。

(岐阜県引揚者団体連合会)

理事長 川村 一正)

## 惨めな逃亡者の足跡

愛知県 川口 吉夫

郷土校卒業後、実業補習学校二年修了、現役志願兵として豊橋騎兵第二十五連隊に昭和七年一月十日入営する。七カ月間の初年兵の教育と目標は満州であると厳しい訓練も済ませ、昭和七年九月二十八日、満州へ派遣の命令が下る。家族にも告げず、連隊を深夜に立、豊橋西駅から貨物有蓋車に愛馬と共に乗車。行く先も知らず駅構内は人影もなく、汽笛も寂しく響き渡り発車をしました。

豊橋駅から東海道沿線では、日の丸の旗を振つてくれる人たちがおり、白く揺れて桜の花が咲いたようである。中には列車と連行している道を一緒に走って送つてくれる人もあり、有り難く出征をする気持ちがあわいてきました。到着したところは神戸港で人馬一緒の乗船。兵器の積み込みを終わり、昭和七年十月一日、神戸港